
いつかどこかの俺の世界【影】

世空 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかの俺の世界【影】

【Nコード】

N7404Y

【作者名】

世空 心

【あらすじ】

それは夢の中の出来事だった。どこから響いてくる歌。それを聞いて歌いだした自分は、気づいて目が覚めると見知らぬ場所に居た。その目の前には一人の少女。「お願い！助けて！私たちを助けて！」神の影たる一人の少年と、世界を知ろうと生きる一人の少女を中心に送る物語。 本編の裏にあたる番外に近い立ち位置の作品です。

断章・夢の中

それは夢だった。

俺は見渡す限りの草原の上に寝そべって、早く流れていく雲井を見ている。通り過ぎていく風の感触が異様に生々しく感じられた。

夢の中に居る自分が、今を夢と認識できる——それは難しいことではないけれど、でもそれは確かに可能なこと。現に今の俺も、ここが夢であると認識できている。夢の中で、俺はただ空を眺めていた。別段、何をしようという気にも、なれない。

「夢の中でも……空は綺麗だな」

腕を伸ばして、雲を掴まんとするように手のひらを開いてみせる。視界一面に広がりを見せる青空は、遠近感を狂わせて、雲に手が届くような、そんな錯覚をもたらした。

そうして空を眺めていると、不意に、風に乗って旋律が流れてきた。俺は風が吹く方向に、視線を向けてみる。少しばかり背丈のある草たちが視界を遮るせいでよくは見えないが、誰かが遠く向こうで歌を歌っているということが、理解できた。

そのメロディーに、どこか既視感を覚える。緩やかで遅い旋律、ゆつくりと歩みを進めていくような、そんなイメージ。ふと、途中まで聞いたところで俺はその正体に気づいた。

「ああ、あれだ……ドヴォルザークの『新世界より』の第二楽章だ」

家路だとか遠き山に日は落ちてだとか、歌の旋律にもよく用いられることがあるなじみ深い曲。昔はよく聞いてたな、なんて、そんなことを思い返していた。

「ああ……なんだろう、こう、聞いていると何か歌いたくなってくるな……」

風に乗って聞こえてくる曲に触発されてか、俺は無性に歌いたいという欲求に駆られる。草に寝そべったまま大きく背伸びをして、深く何度か深呼吸を繰り返すと、そのままの姿勢で歌い始める。

「今はまだ夢の中、あの日の空を夢見てる——」

思いついた歌詞を、思いついた旋律で並べてみる。そこにどうしても既視感が漂っているように感じてしまうのは、やはり記憶の中にある曲から旋律を集めてきてしまうからだろうか——そんなことを考える。

「その中でいつまでも、ずっと空を眺めてた——」

二つ目のフレーズを口ずさんだとき、ふとそこに、別の声が重なったような気がした。少女の声であると、即座に自分は判断する。

「風に撫でられ目覚めると、まだ空を見上げてる——」

歌いながらも、周囲に視線を配ってみると、丁度斜め後方のあたりに、白い人影が見えた。こっちの方を向いているようで、長い髪が風に靡いている様が非常に映えていた。黄金に輝く、綺麗な色だった。

『どこから夢であったのか、それを知ることが無理だから——』

すぐに視線を元に戻して、空を見上げる。歌いながら、自然に口元が緩んでいた。夢の中に見知らぬ少女をつくりだす、そうまでし

て俺は、誰かと歌いたかったのかな——そんなことを考える。

『ただ風の音に耳澄ます——』

少し、間を置いた。流れる風に靡く草。目を閉じて鮮明に聞こえてくる自然の音楽に、少しばかり思いを馳せてみる。何を思ったかは、正直自分でも分からない。

ゆっくりと目を開いて、続きを語った。

『風に運ばれるその歌は、遠い故郷の童歌——』

そして俺は、続きを歌い上げる間もなく強烈な光に包まれる。草原も青空も風も音も、全てが降り注ぐ白い光に染め上げられる。自分の姿も認識できないようなそんな強烈な光の中で、俺は強く目を瞑った。

そして暫くして、瞼の裏からその光が失せる。同時に戻る、音と肌の感覚。

俺は恐る恐る、目を開いてみた。

すると目の前には、白装束に身を包んだ金紗の髪を持つ少女が居た。

「……………」

理解できないその状況に、俺はただ呆然とするばかりだった。

オーブニング「影の君、硝子の私、鳥の貴女」（前書き）

以前投稿したものとはあまり文章を変えていません。連載当初故に稚拙さが目立つ部分もありますが、ご了承ください。

オーブニング「影の君、硝子の私、鳥の貴女」

『Arna・Amaltia（アルナ・アマルティア）』

導師と呼ばれる、魔術師としては最高峰に位置する称号を、最年少で与えられた少女。‘塔’^{タワ}と称される、魔術師たちの協会より与えられる称号で、それは多くの魔術師が夢見る地位でもある。

若くして数々の理論をつくりあげ、古くから言われてきた魔術の基礎理論を覆す仮説を組み上げた、そんな少女である。

そんな天才の名が相応しい彼女に、ある一つの依頼が届いた。

「新しく発見された遺跡の……調査……ね」

それなりに豪華な部屋……であつたと思われる。シャンデリアが照らす下には、かろうじて足の踏み場が存在するだけの床。奥に鎮座する机の周辺には、多数の資料や失敗したと思われる文章が散らばっている。そこに、アルナ・アマルティアは居た。

白いチュニックに身をつつんだ少女。肩よりやや下まで伸ばされた髪は、白人でも少数のブロンドで、少しばかり上気し色づく白い肌が、力ある青色の眼と相まって彼女の元気の良さを表している。そんな彼女の目の前には、質感の良い紙に書かれた文章があつた。

「ふうん……面白そうね。意外とここから近いし……」

それは、‘塔’より寄せられたアルナへの遺跡調査依頼書。報酬の金額がその紙の下の方に書かれていて、それをつまらなそうに指でなぞる。頬杖をつきたため息をはきながら、彼女はその要項に目を通していた。

‘遺跡’。それは神代から存在すると言われている古代の遺物。その形式は様々で、迷宮や魔術的に作られた仮想地下など——共通して今の人の技術とはことなる建造物などのことである。種こそ多岐にわたれど、秘文魔術と称されるようなものや様々な文の断片など、貴重な研究資料が碑石などに刻まれ残されているのである。

聖遺物などと呼ばれるような謎の物体が発見されることもあるが、それらは全て別組織である教会の管理下におかれることになっている。‘塔’としては自分たちの管理下において研究したいものだが、遺跡の調査などでは無償で護衛をしてくれる上、色々と事情が重なって強く言えないでいる。

「あまり読まないで返事しちゃったけど……護衛はいつも通り教会の騎士団ね……え、ここに迎えに来るの？　それももうすぐじゃない！」

そう言いながら、慌てて白地に金のラインの入ったローブを着るアルナ。背や左胸にあたる部分には、瞳をモチーフにしたエンブレムが刺繍されている。導師の称号を与えられた術士にのみ許された刺繍である。

導師のローブに身を包み、調査用の道具をそろえ終わった頃。玄関の方から人の呼ぶ声がした。

「あーるなさん！！　迎えに来ましたよ！！」

もう幾分か顔見知りになった迎えの騎士達に付き添われ、たどった先は山中。岩肌だけが見える平地となった場所に彼女が現れると、ローブ姿の青年がその姿に気付いた。

「アルナ導師、お疲れ様です！」

純白のローブに身を包んだ少女導師。国どころか世界的にも有名な彼女のその特徴は、所見の相手にも正体が良く分かったようで、彼女の姿を認めてすぐにあいさつをする。

「お疲れ様。ここの遺跡の概要ぐらいの資料は出来上がっているかしら？」

挨拶を返し、その青年に質問をするアルナ。尊敬する導師に話しかけられ、彼は嬉しそうな様子で返事をする。

「はい！ ただいまお持ちいたします！」

元気のいい若手——それでもアルナよりは年上だが——が、最年少導師の指示を受けて元気のいい返事をする。かけていくローブ姿をみて、アルナはにこやかに言った。

「うんうん、若いのは元気でいいわね！」

「何言ってるの、アルナの方が若いでしょうに」

背後からかけられるから女性の声。アルナが振り返ってみると、そこには軽鎧を装備した女性が立っていた。

アルナよりはやくすんだ色合いのブロンドで、長い髪は一つの三つ編みに纏められている。背も妹より高く、その肉体は女性なが

ら鍛えられているのがよくわかり、引き締まった顔つきからは、お姉さんというよりも姐御というのがしっくり来るようだった。その姿を認めると、アルナの表情に喜色が浮かび上がる。

「あ、お姉ちゃんのとこの騎士団の担当だったんだ、今回」

アルナの姉ステイリア・アマルティア。教会騎士団に所属する槍^ラ騎士^{ンサー}で、彼女もここ最近頭角を現してきている若手として、妹共々知名度がある。妹の姿を認めた、彼女とは対照的な姉は、野性的な笑みを浮かべた。

「何言ってるの。迎えに行ってたのはあたしのとこの団員でしょうが」

「お姉ちゃんこそ何言ってるのよ。誰のところが担当でもお姉ちゃんのとこの人が来るでしょうに」

「そうだったっけ？」

妹の切り返しに、忘れていたと答え快活に笑う姉。殆どが男性の騎士団の中で数少ない女性であるステイリアは、幾つかある団の一つを束ねる騎士団長の一人だった。彼女たち騎士団長の上位には、総騎士団長が存在する。今は空席だが。

姉妹の談笑をしている内に、頼んでいた資料が届いた。そこに書かれた遺跡の見取り図を見て、アルナは眉を顰める。

「何よこれ？ これじゃあまるで巨大な魔方陣じゃない」

半径数十メートルにわたり、環状に碑石が並ぶことを示すスケッチが描かれている。恐らく飛べる使い魔を所有していた術者が視覚

共有を用いて書いたものだろう。

「……でも面白そうね」

アルナが知る限り……いや、塔^{タワー}が知っている遺跡の中には、このようなものは存在しなかった。今までよりもずっと未知に包まれた遺跡の調査と知り、アルナの知識欲が加速する。

「あ、アルナ？ 前々から言ってるけど、その笑い方不気味よ？」

「フフフフ……お姉ちゃん。これが笑わずにいられる？ 未知の形式の遺跡よ？ しかもこの調査団で導師なのは私だけ……つまり調査の全権が私にあるのよ？ ああ、楽しみだわ。一体どんな面白いものが出てくるのかしら？ ここ最近^{最近}は爺^爺ど——先輩と合同が多かったもの、楽しみにせずにはいられないわ」

紙を見つめ不敵に笑うアルナ。少々引き気味のステイリア。そして資料を見つめているうち、あることに気付いたアルナが姉に問う。

「あら？ 今回の護衛の騎士団の人数……百人？ お姉ちゃん、多すぎない、これ？」

この近辺で強力な魔獣の出現情報は無い。群れでなく二、三匹程度のこのあたりの魔獣では、（警備範囲は別として）目の前の姉一人で十分お釣りが来るのだ。なのに百人という今回の人数。それは余りにも不思議なものだった。

「あ、それなんだけどね。何だか‘例の研究施設’の廃墟が見つかったらしくってさ、その調査も今回は含まれてるのよ」

‘例の研究施設’その単語を聞いてアルナは表情を強張らせる。顔色も若干青ざめているようだ。

「う、嘘…お、お姉ちゃん、そこ墮^{オチガミ}嚙とか残ってたりしないよね？」

‘例の研究施設’と称されるもの。それは七年前の戦乱で使用された人造魔獣を製造したと思われる施設。国を跨いで様々な場所に点在し、その各所に人を兵器に転用する研究の資料が残されていた。極々稀に、戦乱で表に出てこなかった人造魔獣が施設に残っていたこともあり、戦乱が終わった直後も時折追加の戦死者が度々出ることがあった。

「何言ってるの。もうあれから七年、アレらだって生き物なんだから、その間施設に閉じ込められて生きている訳ないでしょうに」

妹の懸念は的外れだと、そう笑い飛ばすステイリア。アルナの方も、言われてみればそうだと姉の言葉を聞いて安心した表情になった。

その時、彼女達の頭頂部に冷たい感覚が走る。気になって視線を上げたステイリアの眼に、水滴が飛び込んできた。雨である。

「うひゃ！ 雨！？」

「あっちゃ、山の天気は変わりやすいものね…お姉ちゃん、仮設テントは何処？」

徐々に強まる雨の中、姉妹は他の魔術師や騎士達と共に、雨除けのため仮設されたテントエリアに向かっていった。

第一小節「オノレノウレウベ」

「おいおい、雨が降りやがって来たぜ」

急に暗くなつた空から、水滴が落ちてくる。

雨が降ってきたと、そういったのは‘例の研究施設’の調査に借り出されていた数名の魔術師と数十人の騎士団、の中の一人の騎士だった。

「あゝあゝとつとこんな調査終わらせて遺跡の調査団の方に合流しようぜ？　今日は姐御の妹さんが来てるらしいじゃねえか。拝んどかねえと損だぜ、ホント」

「なに！？　あのアルナ導師が来てるのかね！？」

騎士のぼやきに、近くに居た魔術師が反応を見せた。そして彼を中心に、周囲の魔術師と騎士団が少し騒がしくなる。

「おい貴様、姐御の妹君が来てるだなんて何故言わないのだ！」

「そうだ！　それを知っていれば、我々はもつと迅速に行動していたのですぞ！」

魔術師からしてみれば、純白のローブに輝く金紗の髪の毛、最年少の天才少女導師。騎士団の面々からしてみれば、敬愛する団長の可愛らしい実妹。双方の集団においてアイドルのような地位に居るアルナ。その訪問の報告（？）を怠った罰は重かった。周囲の殺意に似た感情の籠つた視線を一心にぶつけられる。年長の騎士数名がその彼ににじり寄った。

「いや、え、なに…ハイ、ほ、ホントすいませんしたって…いやマジでや——あ、ああああああああ!？」

「全く、貴様は何度言ったら分かるのだ？ 妹君の訪問の報告は最優先事項だと我々の騎士団ではいつも言っていただろう?。」

若い騎士団員が、年長の騎士団にシメられる。沈黙した彼を他所に、一同は向き合う。無言で彼らは頷き合つと、言葉を交わさずに総意を纏め、その集団は足早に調査目標に足を進めた。

????????????????

一同がたどり着いたその地点には、岩肌に掘られたように彼らを出迎える大口の入り口と、やや黄色く色付いた光る霧が待ち受けていた。

「む、総員、マスクの装備が呼吸器系の魔術を行使せよ。ここは、ミスト地帯、だ」

その場で指揮権限を持つ騎士が、皆にそのように指示を出す。騎士団は皆兜のフェイスガードを下ろし、魔術師達は緑色の魔石を取り出して魔術を唱えた。

空気中に濃密度の魔力が存在していた場合、それらはそのエリアの属性色の色をまとうて霧となつて出現することが知られている。その濃密度の魔力を含む空気は人体には悪影響で、時には死者が出るほどだ。だが、これは簡単な処置を施したマスクの使用や魔術などで防ぐことが出来る。教会に限らずこの世界に存在する騎士団の兜には、このマスクの処置が標準で施されている。

一同が進入した施設内は、外よりも濃密なミストで包まれていた。

施設内に入り、魔術師の人数と同じだけ班を分けて調査に入る。

「にしまつてもぶつきみだなあ…ん？」

若い騎士団員は、施設のそう奥でもない場所にあるものを見つけ
る。それは、結晶に閉じ込められた、首の無い二メートル半ほどの
ヒトガタ、だった。

「おいおいおいおいマジかよおい…」

彼は先輩騎士にこのことを報告するために、その場走り去った。
残されたその結晶の中には、紅い光が灯り始めているのに、すぐに
立ち去った若い騎士は気付くことが出来なかった。

????????????

「あゝああ、折角これからだつていうのに……」

会議用の大きな天幕の内側から、外の雨模様を恨めしげにアルナ
は見つめていた。折角の調査が出鼻を挫かれた形になってしまった
からである。

「ほらほらそんな顔しない、アルナ。折角の美人が台無しだゾ？」

眉を顰めるアルナのおでこを、人差し指でステイリアが突く。そ
れでもアルナは、機嫌が悪そうに口を窄めるだけである。さらに言
葉をつむごうと彼女が口を開いて???

その時、天幕に一人の男性が駆け込んできた。雨に濡れ、土に汚

れ、顔は息が上がっているにもかかわらず蒼白である。鎧も兜も打ち捨て身軽にしてここまで全力で疾走してきたと見受けられるその様子は、二人に事態がただ事では無い事を予感させた。

「あ、あ姐御！ 大変です！」

「団長と呼べと言っているだろう！」

「今はそれどころじゃないですあね… 団長殿！ 己憂部です！ 墮^{オチ}噛^{ガミ}です！」

その報告は、若い騎士団長を戦慄させ、その妹を恐怖させた。口早に、その若手の騎士は報告を続ける。砕けた口調と敬語が微妙に混じりおかしなものになっているが、彼の精神状態を考えると仕方ないものだった。実戦経験の少ない若手の騎士に、墮^{オチ}噛^{ガミ}の‘アレ’を受けて冷静になっているというのが無理だというものだろう。

「結晶の中で仮死状態で生きてやがりました！ オレは装備を全部捨てて先行してきて、今はセンパイたちが足止めしつつコツチ来てます！」

その報告を受けて、ステイリアは即座に行動に移った。若いながらも騎士に指示を飛ばすその姿は、アルナの目には普段の姉とは違っただけで、頼もしいものだった。

「お前は騎士を集めろ！ 夜の番に備えて仮眠を取ってる奴らも叩き起こせ！ 魔術師連中を中心に、陣を組むぞ！」

指示を出された騎士は再び外に駆けていく。そのテントエリアは、襲撃の報告に騒然となった。

その場に残っていた人員が集い終わった頃、彼らの耳に音が聞こえる。

それは湿った空気の中に似つかわしくない、乾いた、餓えた声だった。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……」

七年前、多くの人が耳にしたであろう己^{コウベ}憂部たちの声が聞こえてくる。それは一方から来るものではなく、全方位から聞こえてきた。

「姉御お！！ 既にここは包囲されています！ 俺らは、見つかりました！！ じきにヤツも来ます！」

施設側の方向から、騎士と数人の魔術師の声が聞こえ、その姿を見せた。数十人だった一団は十数人にまでその数を減らしており、事の次第を暗示している。ステイリアが声を張り上げた。

「団長と呼べ！！ 総員、遺跡中央に向かえ、陣を組むぞ！ 墮^{オチガミ}嚙は一度見つけた獲物は地の果てだろうと追い続ける！ この場で迎え撃つぞ！ 魔術師達も御覚悟を！」

あえてその場に居なかった人員の行方は聞かない。墮^{オチガミ}嚙から逃れられなかったのならば、皆血の糧となりその体に塗りつけられていたことだろう。それが分かるからだ。故に他もそのことを言及しない、今は自身の命が最優先なのだ。

「己憂部^{「ウヘ」}…資料でしか見たことなかったけど、アレが、そうなのね」

岩の陰から蟻のように湧き出てくる己憂部^{「ウヘ」}たち。その膨れ上がった風船状の頭部と肋骨の浮き出た瘦躯を目にして、アルナはそう呟いた。この場で最も年齢の低いアルナは、この場で唯一その姿を見たことがない者だった。最も、半数以上は墮嚙^{オチガミ}を見たことが無いが

一団を取り囲むように、己憂部^{「ウヘ」}たちが円を描いて立ち止まる。本体を待っているのだ。

「不用意に手出しするな。本体だけに気を配っていればいい。無視しろ」

国軍や騎士団で使われた墮嚙^{オチガミ}の俗称を用いて、ステイリアはどのように指示を出す。墮嚙^{オチガミ}が来るであろう方向に騎士団が陣を取り、その後方に守られるように魔術師たちが集まる。その時分かったのだが、施設調査に向かった魔術師は奇跡的に全員が無事であったようだ。

騎士たちが各々の懐から十字架を出す。彼らを教会騎士団たらしめている武装、^{クロスウェポン}十字兵装だ。

「El - o - a u s , a h s i u m t d e s t (汝皆、灰と塵に還れ)」

合図も無く、揃った詠唱が行われる。光が広がり、それぞれの武器を形作った。剣・槍で構成されているが、比率的には槍の者が多い。そのフォルムは個人で差があるが、みな十字型を基本の意匠としている。

そして、間の前の己^{「ウツ」}憂部の垣根が分けられる。本体が来たのだ。

「!!! 流石に、キツイものだな…」

まだその姿が見えていないのにも関わらず、空気中の魔力を媒体に感情がぶつつけられて来る。共振現象と呼ばれるそれに恐慌するものは居なかったが、雨で冷えるのもあいまって、皆総じてその身が強張る。

未だ姿を見せない敵に備え、ステイリアが指示を出した。

「総員、青の魔石を出せ」

雨が降り注ぐこの天候では、水に由来する幻想の強度が増す。そんな魔術の基本知識を持ち合わせるステイリアは、その魔術の一斉射を試みようというのだ。

「^{ヘッドレス}頭無しが近い。三節以下の射撃系の魔術を用意、目視と同時に一斉射を加える！」

雨の天候でもよく通る姉の声を聞いて、後方のアルナも魔石をロープの内側から取り出す。ロープは水滴を弾き、重くなることは無かったが、被ったフードの前面からぶつかる雨が、彼女の顔を濡らしていた。

魔石を左手に握り、身の丈近い杖はその先を前方に向けられる。左手の中で魔石は砕け、その粒子が杖の先に陣を描いていった。

「Ol wind issa, kocim chekim deki
m:xress sifiea（その水面^{みなも}、固く硬く堅く…硝子と集え）」

実戦経験が少ないながらも、導師として高い実力を持つアルナが、最も早く詠唱を開始した。後に続くように、周囲の騎士・魔術師たちも詠唱を開始する。

「S i k a e t u a r i n a i a m : o w z e e n e m i y l d o i n w e i a s a (透き通りなさい…そこに空を映しなさい)」

高圧に固められた水の塊が、魔方陣の先に形成されていく。幻想の水だけでなく、それにぶつかる実在の水も吸収しているようだった。

「A l v i s a d i o r a m , y o i e t i m i l a k u m u f e n n e s s a (日が昇るまで、貴方は時を待ちなさい)」

誰よりも巨大な水槍が、誰よりも早く形成された。前に居る騎士達はその光景を見ることは出来ていないが、周囲の魔術師たちは導師たる実力を目の当たりにして、彼女に尊敬のまなざしを送っていた。

アルナの水槍の完成から三十秒、最後の水弾が完成して十五秒…
オチガミ 堕嚙が姿を現した。

「S h c u t i e a (射れ)！」

ステイリアの号令に従って、皆の魔術が一斉に襲い掛かる。
オチガミ その刃先は、一つも違えず、反応出来ない堕嚙を捉えていた。

第二小節「共振現象」

多数の術師の手で作り出された多数の水槍。雨模様という、水の幻想を作り出すには最適な条件下で生み出されたそれは、全てが墮^{オチ}嚙^{ガミ}を捉えていた。

いける——皆の思考には共通してそのような思いが浮かんでいた、だが。

「え……嘘……」

全ての魔術が、ただ一つもその巨軀に届くことなく霧散したのだ。青い粒子の輝きを残してあっけなく消えていく魔術たちに、誰もが言葉を失っていた。アルナの驚愕の声が、小さいにも関わらず最前列のステイリアの耳にまで聞こえてくる。

「■■■■■■！！！」

「つく！？ 総員散開！ 魔術師は下がれ！ 我らはヘッドレスを包囲するぞ！」

墮^{オチ}嚙^{ガミ}が、声なき叫びと共に迫りくる。その右手に握るのは巨大な鉄塊の剣。人ならば持ち上げることすら数人がかりとなりそうな代物を引きずりながら迫りくるその姿は、魔術を無効化したことも相まって恐怖心を煽る要因となる。ステイリアの檄を飛ばすような指示に彼らは一応の平静を取り戻し、指示の通りに墮^{オチ}嚙^{ガミ}を取り囲んだ。後退する魔術師の中から一步、アルナが歩み出て姉に向かって叫んだ。

「墮^{オチ}嚙^{ガミ}の体表についてるのは、多分変質した魔石よ！ その影響で

厚い神秘層^{ベール}をまとってるみたい、多分殆ど魔術は通らないわ!!」

「■■■■!!!!」

彼女の叫び声をかき消すように、墮嚙がその鉄塊を地面に強く叩き付けた。人には扱うことなど不可能な質量と常識はずれの臂力が合わさることで、轟音と共に地面の表面が破碎、それは轟音と共に石片をまき散らす。

その一振りが物語るその威力。まともに受けずとも人間であれば軽々と屠られていくであろうことが予測でき、対峙する騎士たちはその顔を青ざめさせる。

「つく!? なんて馬鹿力だ。あんなの受けたら武器ごと潰されちまうんじゃない」

騎士の一人が、墮嚙のその理不尽な肉体性能に悪態をつく。自分がまだ新米騎士だったところに同じ感想を抱いたこともあるステイリアが、攻撃範囲内に入らないようにと指示を出した。

だが、それでは墮嚙に攻撃を加えることはできない。頭の無いままに2メートル半にまで肥大化した元人間である魔獣は、やりを装備する騎士たちよりも長大な攻撃範囲を誇る。防ぐことのできない攻撃を、回避に徹するしかなかった。

取り囲んだ別の騎士が後方から攻撃のそぶりを見せる。するとそれが見えているかのように敵は振り返り、その勢いで鉄塊を振り払う。風を薙ぐ轟音と共に振り払われるそれを、予期していたように騎士は回避した。

「奴との交戦経験があるのが約半数……でも昔は攻撃魔術が通用したから何とかなってた……」

墮嚙をその場に食い止めるような陣形を組み、攻撃を‘装う’、ローテーションに加わりながら、ステイリアは思考する。既に墮嚙との交戦経験のない騎士たちは後方に下げ魔術師たちの護衛につかせている。

今のところ（施設での犠牲者を除き）犠牲は出ていない。今はまだ大丈夫だが、共振現象で圧迫されていく精神は、普段よりも格段に早く体力を削っていく。

今は興奮状態で大丈夫そうだが、魔術師たちの精神状態は恐らくこれ以上の戦闘に耐えられない。騎士団は、射程外からの攻撃という集団を失った状態で、墮嚙と対峙しなくてはいけない状況に追い込まれていた。想定外すぎる事態である。

「あね……団長！ このままでは我々がもちません！」

次第に他の騎士たちからも悲鳴に似た叫びがあがってくる。次第に動きも鈍くなってきていた。

だというのに、あの大質量の剣を振り回しているというのに、いつこうに墮嚙は疲労を見せる様子が無い。オチガミ

「くそ、バケモノめ！」

そう、悪態をついた時だった。墮嚙を取り囲む騎士たちの環の外から、何かが投げ込まれたのである。それは黄色の光を放つ小さな石で、転がり止まった先は墮嚙の足元であった。光を放つそれは地面にしみ込むように溶けていった。瞬く間にそれは魔法陣を描き出す。

「みんな！ 一旦下がって！」

後方から聞こえた叫び声、それに振り返る間もなく、その魔法陣

を中心に地面が崩壊した。

「
■ ■ ■ ! ?」

投げ込まれた魔石のすぐ近くにあった堕嚙の右足が、その崩壊した地面に飲み込まれる。急に崩れていった足場に反応しきれない堕嚙は、その姿勢を崩して前のめりに倒れこみそうになる。

「直接魔術が効かなくなつて、間接的になら！ 今よ、お姉ちゃん
！！」

突然のことに動きが固まっていたステイリアが、アルナの叫びに
呼応して指示を出す。

「総員、やれえ！」

騎士たちが一斉に堕嚙に躍り掛かる。四方八方から迫りくる穂先
たち。堕嚙はそれを右手に持った鉄塊で振り払うが、足を陥没した
地面にとられていては後方まで手は届かない。防ぎきれなかった幾
本もの槍が、堕嚙に傷をつける。

だが、堕嚙の体から生えるようにして存在する結晶質が、騎士た
ちの攻撃を防ぐ鎧となる。

「つく、刃が通らねえ！？」

「隙間をつけ！ 奴が立ち上がりきる前に何としても深手を与える
んだよ！！ アルナ、あまり前に出ないで！！ 巻き込まれるよ！」

「直接きかないだけなんだから、幾らでもやりようはあるわ！ 皆、
私の前を開けなさい！ 巻き込まれるわよ！ O l W e n d i s

s a , s u k o l u r i o e s s a e l s i c l m (その水面、
まどか
円に降り注いで) 「

後方の集団から前に走り出たアルナが、宙に魔石を放り投げる。
愛用する杖を掲げ魔石を指すと、それは青い輝きを放って砕け散り、
中空に地面に向いた陣を描き出した。その生成を見届けて、彼女は
勢いよく杖を振り下ろす。

「あの子は何を……総員、アルナの魔術に合わせて攻撃しろ！ ほ
ら右翼ビビってないで！ あたしに続いて足止めに加わりなさい！
！」

アルナの魔法陣から生まれた水の刃が、地面を抉るように閃く。
眼前にできた幾本ものラインに杖を向けると、緑に輝く魔石を胸元
に握りしめながら呟いた。

「A p t u n t e i l a i w o n e k l a s i c a (舞いて
と願うでは) R i l z e d a k m (昏くして)」

石がひび割れ、擦れる音が響く。アルナの詠唱と共に、切り取ら
れた地面が浮かび上がりそれは空高く舞い上がった。切り取られた
後の地面が深くえぐれている。

大きく切り取られたその岩はある程度の高さで停止した。詠唱を
完了させたアルナの、その杖が墮嚙に向けられる。

「V r e d a (放て)!!」

「■■!!!!!!」

アルナの叫びと、墮嚙が態勢をたてなおすのはほぼ同時だった。

墮嚙の左から迫りくる岩塊、それを敵は打ち落とそうとはせずに、腕で身を守るような態勢をとった。

岩塊が、重苦しい音をたてて墮嚙に衝突する。その衝撃は甚大であることが容易に想像でき、受け止めた左腕の結晶質があたりには撒かれる。大きくその巨体が揺らいで、後方に倒れこむ、そのように思われた。

! ! ! ! !

「うおわあ！？」

受け止めた岩塊を、墮嚙が振り払った。石片をまき散らしながら飛び散りるそれは、周囲を取り囲んでいた騎士を巻き込みかける。辛うじてその範囲内に居た騎士たちは回避することが出来た。

「流石に物理的な攻撃で倒すのは難しいみたいね……つ！？！？」

アルナが次の魔術を放とうと懐から魔石を取り出したその時、その表情が凍り付く。固まっ たまま、彼女の手から魔石が転がり落ちた。

ゆつくりと、墮嚙はその体の向きを変える。妹の異変にいち早く気づいたステイリアは、状況を誰よりも早く理解した。

1

「は……目標をアルナに変えた!？」

墮嚙の最大の特徴とも言われている共振現象。強い感情と魔力との共振によって引き起こされるそれは、対象に強い感情をぶつけることが出来る。墮嚙の場合は、むき出しにされた‘食欲’。強い嫌

悪感を与え、時には気絶するものが居るほどの強い感情は、攻撃対象に特に強くむけられる。

予期せずして強まったその純粹すぎる感情に、過去幾人もの人間が足をすくませ、餌食となっていた。

それが今、アルナに適用されようとしている。ステイリアは駆け出した。

「アルナはやらせない!!」

第三小節「あなたはだれ？」

「止まれえ！！」

反撃を受ける可能性を厭わず、ステイリアはその槍を大きく振りかぶる。そしてその切先で切りつけるように、落嚙の右足めがけて振り抜いた。

「姉御！！ 危険です！ 下がってください！」

「ここで注意を惹かなきゃ……アルナが危ないでしょうが！」

団員の言葉に、ステイリアは叫び返す。彼女は立て続けに攻撃を繰り出し、堕嚙が反撃に移るまでに二度の刺突と一度の斬撃を追加していた。

攻撃対象を元々定めていたせいか、堕嚙の反応は遅れる。振り向きざまの一撃はやすやすと回避された。

「そうよ、こっちに来なさい。あんたの相手はあたしだよ！」

挑発するように攻撃を仕掛けようとするステイリアに対し、堕嚙はその手に持つ鉄塊を振り回して応える。守りに秀でた技術が発達する教会騎士の人間であっても、その攻撃を受けることは不可能に等しい。

疲労を知らないかのように繰り出される鉄塊の攻撃に、ステイリアは舌打ちをするしかなかった。一撃が地面を砕くその攻撃に、正面から対峙することは称賛に値することであったが、反撃を繰り出せずにいた。

「お、おねえちゃん！」

「導師、姉御は私たちが援護します！ 貴女は後方に下がってください。我々では盾になることはできません！」

ステイリアに遅れて追いついた騎士たちが、彼女を援護しようとして取り囲むように陣形を組みはじめる。同時にその中から一人が歩み出て、アルナを後方に退かせようとした——その時だった。

ステイリアの焦った表情がアルナの目に入り、急いた声が耳に入る。

「バカ！ 前に出すぎだ、退けえ！！！」

ステイリアと同じように奇襲をかけようとしたのだろうか。

一人の騎士が、墮嚙の背後から攻撃を仕掛けようと大きく踏み出していた。それは自身の得物の攻撃範囲内、だが同時に、それは墮嚙の攻撃範囲内でもあった。

「
■！！！」

特に大きな隙を見せているわけでも無かった墮嚙は、その背後の騎士の行動に反応し振り向いた。自身に迫る槍の穂先を、その左腕で振り払う。少しばかり傷こそついたものの、その槍は振り払われたことにより大きく弾かれた。騎士の手から離れるほどに。

「あ……」

呆然とする騎士。その圧倒的重量の得物を振り上げる墮嚙。

「うあああああ！！！」

振り下ろされる大剣を、地を転がるように避ける。地面に倒れこんだその騎士は、恐怖と焦燥からか、上手く立つことが出来ないで、だが必死に堕噛から遠ざかるうともがく。それを追うようにまた鉄塊の大剣を振り上げる堕噛の背後からは、仲間の騎士たちが先ほどその騎士がしたように踏込をかけるが、それに堕噛は一向に反応しない。

「くそお！」

騎士の一人が、半ば自棄になったかのようにその槍を堕噛に向かって投げつけた。だがそれは振るわれた鉄塊に容易く阻まれる。そしてついに、堕噛はその騎士を捉えた。

「あああああああああああああああ……………」

恐怖に叫んだ騎士の、その叫びが途絶える。圧倒的握力に頭部を握り潰されたのだ。

頭蓋が碎ける音が聞こえ、脳髓が水溜りに音をたてて滴る。その光景に、騎士は凍りついた。

潰した獲物を、その胸を鷲掴みにして頭部の拘束具の真上まで持つてくる——そして握り潰した体から噴出した血液を、その拘束具に塗りつけたのだ。

まるで上向きに開いた口に食べ物を詰め込むかのように、オチガミ堕噛はその血液を拘束具に塗り手繰る。だがそうして摂取することの出来ない血液たちは、巨軀を伝ってその足元に赤の水溜りを作っていた。

これが、オチガミ堕噛の食事。その名が、噛むことを堕ちた、の文字を取

る所以。^{ゆえん}その食事は、体内の消化器官を使って行われるのでは無い。本来あるはずの頭部を封印した拘束具から、血液中の微量な成分を魔術的に摂取するという、非効率極まりない手法で行われるのだ。

だが元は人間…故に彼らはそれで空腹を満たす感覚を得ることが出来ない。食べた感覚があるだけで、満ちることの無い…いやさらに強くなる空腹。洗脳ではなく、そうした本能を極限まで実用的に、戦闘向きになるように作られたのが、この墮嚙^{オチガミ}なのだ。

その食事光景を目の当たりにして、背後では嗚咽する声が聞こえる。実際に墮嚙^{オチガミ}と戦闘していた騎士たちにも、その動揺は広がっていた——致命的なまでに。

「う、うあああああああ！！！！」

その食事光景を見て、次は自分だとも思っただろう。食事中の墮嚙^{オチガミ}に一人の騎士が攻撃を仕掛けたのだ。だがそれは、非常に拙い事態だった。

「馬鹿！！ 止める！ 今攻撃を仕掛けたら？？？？？」

その言葉は最後まで紡がれる事は無かった。

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)…」

「katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)……katuke katuke, kitichetto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ)…」

それまで沈黙していた己^{コウベ}憂部たちが、突如襲い掛かってきたのだ。

「ウ——！」

騎士につれられて後方に戻ったアルナ。その傍らの魔術師が、胃の中のものを地面にこぼす。堕嚙オチガミの食事光景を見る彼女は、顔面蒼白で唇を強く結び、手に持つ杖を抱きしめた。

その恐怖に、逃げ出したいと誰もが思った。だが周囲は目視するだけで三桁は居る己憂部コウベたち。この一団が一塊になるうとも抜け出せる包囲では無い。

その事実には、一人恐慌した騎士が居た。食事オチガミ中の堕嚙に襲い掛かったのだ。その光景に、アルナを始め魔術師たちは心臓が止まったように思った。

堕嚙オチガミ。その行動理念は全て食欲に起因する。ヤツは自身の食事が邪魔されることを許さない——ではどうするか？それは、己憂部コウベに襲わせるといふ手段だった。

いままで静かに佇んでいたソレらが一斉に襲い来る。こちらの数十倍もの瘦躯の尖兵が一斉に襲い掛かってきたのだ。

「う、来るな！ 来るなあ！！ 来るなああ！！！」

恐怖に顔を歪め、騎士達は剣を槍を振るい闇雲にそれらを打ち払う。一体一体の能力は（尻込みさえしなければ）新兵ほどの鍊度で御釣りが来ると言われるほど弱いそれだが、次々に襲い来る物量に次第に押され始める。姉たちの方も、必死にそれらを振り払っていた。

「ああああああ！？」

最早式を練り詠唱する余裕すら失った魔術師たちは、ただ恐慌するだけである。中には討ち漏れた己憂部ヨウベに引き裂かれる者も居た。その光景を、アルナは呆然と見ていた。叫ぶことも喚くことも恐怖に身を任せることもせず、ただただ固まって光景を見つめるだけだった。

ここで私は死んでしまうのだろうか？

そんな思いが頭を過ぎる

そんな時に、彼女の脳内に声が聞こえた。

『遠く向こう空の下、日は赤く沈んでく』

「え？」

突然聞こえた言葉……いや歌。それを耳にしたアルナは自身の現状も忘れて周囲を見渡す。気づくと、自分の足元が光っていた？？？そこはどうやらこの遺跡の中心だったらしい。

『小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見る。何処か違う別の場所、違う人が空を見る』

それは、いつだったか姉に連れて行って聞かされた教会？？？そこで聞かされた音楽に似たような旋律があったような気がした。だが歌詞に聞き覚えは無い。そもそも詠語でない歌詞を教会の人間は歌わない。

『時や場所や名前や歳や……みんな違っているけども、それでも

同じ夕日を眺めてる』

いや、かすかに詠語の歌詞の旋律も、少女の声と共に聞こえてくる。どうやら男の声が訳を同時に口ずさんでいるようだ。

気づかないうちに、アルナは地面に手を添えている。

『いつも隣に誰か居て、そう願いはしないけど』

（これは嘘でしょうね…貴女はきつと、誰かに側に居て欲しいのよ）最早何故という思考も無い。恐怖に凍りついていたその心は、突然耳に聞こえてきた心地よい音に奪われていた。盲目的に、無思考に、それに意識を向けている。

『せめて同じ景色を眺めて欲しい、そんなささやかな願いだけ』

（寂しかったのかな？ それだけでいいなんて…少し、可哀想）

視界が次第に光に包まれる。薄い青のその光は、いつもは頭上に広がっている蒼穹を連想させた。

意識が霞に、霧に、包まれる。

直後に流れてきた新たなメロディーに、頭に浮かんだ詩をのせて、口は勝手に紡ぎ出した。

「『今はまだ夢の中、あの日の空を夢見てる』」

脳裏に浮かんでくるのは、草原と蒼穹。

「『その中でいつまでも、ずっと空を眺めてた』」

そこで、一人の人物が仰向けになっているのが見える。だが認識があやふやで、容姿も性別も何もよくは分らない。

「『風に撫でられ目覚めると、まだ空を見上げてる』」

風が前から吹いてくる。視界が更に霞み、見ようとする姿を捉えきれない。

「『どこから夢であつたのか、それを知ることとは無理だからただ風の音に耳澄ます』」

ねえ、アナタは誰？ その言葉を口にしようと思うが、思うように動いてくれない。糸で繰られたように、浮かんだ詩を音にするこ
としか出来ない。

「『風に運ばれるその歌は』」

光が更に強まる。視界はもう何も映さなくなっていた。

「『遠い故郷の童歌』」

それを最後に、全身にかかった糸が切れた気がした。

第四小節「世界を感じているか？」

果たして何体の……いや、何十体の己憂部「ウベ」を打ち払っただろう。

地に槍を突き立て、寄りかかり、息を荒げてステイリアは考えた。人一人を食らう食事の間、絶え間なく襲い来るソレを討ち続けた。

隣で同僚がその瘦躯の下に埋め尽くされようと、それを助ける余裕さえ無い。

堕嚙オチガミが食事を終え、己憂部「ウベ」が引き下がっていく頃には、数十居た人間は見る影もないまでに減っていた。新たに出来た食事を、尖兵どもは本体の下に引きずっている。

いつの間にか、曇天はそのままに、雨は止んでいた。

「……！！………そうだ！ アルナ！！！」

妹の安否を確認する為に、視線を上げる。不安げに力なく、ゆっくりとあげられた視線の先には、座り込んでいるが確かに息をしている実妹の姿があった。

「よかった……」

幸運とはとても言えない状況だが、ステイリアは彼女の強運に心から感謝した。そうして新たに出来た食事を取り始める堕嚙オチガミに背を向けながら、彼女の様子を観察していると、その目の前に白髪の青年が立っているのが見えた。

「……………」
「……………」

光に包まれたアルナには、己憂部の腕が届くことは無かった。光の繭のようなものに包まれて、ソレが解けた頃には己憂部たちの攻撃は止んでいた。

周囲では数人分の血痕と、負傷して蹲る数人の騎士と魔術師が居た。命を落とした者は皆、本体の下に食事として連れて行かれたようだ。

そしてアルナの目の前には、青年が立っていた。

「貴方は…誰？」

色落ちした白髪、色の薄い肌、アルナよりも淡い青の眼、そして対照的に漆黒のズボンにタートルネック。見たことの無い特徴の顔つきで、その背は高い。年齢は、アルナと同じぐらいだろう。

質問をぶつけられた白髪の男は、口を開き…何事かを喋ろうとする。だが、それが音になって出てこない。その光景に、アルナだけではなく、本人までが不振げな顔をする。アルナは、まずは自分の名前を告げることにした。

「私の名前はアルナ。アルナ・アマルティア」

「アルナ・アマルティア、か……ん？ ……日本語？」

突然、男が効きなれない単語を口にする。状況を掴めず、首を傾げた。状況が呑み込めないでいるのは男の方も同じであるようで、周囲を忙しなく見まわしはじめた。

「ローブ……騎士？ 血……こう……べ？ うつぶ……あれは、堕嚙か？ なんだよ、おい……これ……」

男は次第に状況を理解し始めたようだ。だが、さらに混乱し始めているようにも見える。その顔が、アルナと同じように蒼白になり始める——ちょうどその時だった。男が何やら左手を抑えて呻き始めた。

「いつつ………！！」

「！？ いた………！！」

それと殆ど時を同じくして、アルナの左手甲に熱が走る。慌てて確認してみると、そこには何やら複雑な幾何学模様の陣が薄青色の光を放っていた。アルナの見立てでは、それは主従契約の刻印の一種であった。

そこで、ようやくアルナの意識ははつきりと現実に戻ってきた。

オチガミ 堕嚙の方を見る。その方向には、こちらを心配そうに見つめている姉の姿があった。

オチガミ そう、自分たちは堕嚙に襲われていたのだ。

そのことを思い出して、そして混乱の果てで整理のついていなかった恐怖心も戻ってきて、彼女は冷静さを失ってしまった。

目の前の男に視線を戻す。自分は突然聞こえて来た声に従って、なにやら詠唱をしていた。そして何か魔術が成立したと思われる光が視界をつつんだ後、目の前にこの男性が現れていたのだ。

何者なのかは分からない、強いのか弱いのかも分からない。でも彼女には、もう目の前の存在にすぎるしかなくなっていた。必死の形相で、彼女は捲くし立て始める。

眼前の、その左手に自分のものと対の刻印を持つ男に。

「アナタ、私の使い魔なんでしょう！？ そうなのよね！？」

「えあ？ 何？」

「お願い！ 助けて！ 私たちを助けて！ アレを倒して！ お願い！」

最早すがりつくような勢いで、堰を切ったように半ば狂乱で懇願する。いきなりのその少女の変わりようにたじろぎ、その今にも泣き出しそうな表情に、そして懇願の勢いに押されてしまっていた

「お願い！ もう貴方しか頼れないの！ 助けて！ おねがい！！」

「分かった、分かったって。行くって、俺、行くから…？ だから落ち着いてくれ」

少しでも安心させようという心遣いだろう。落ち着いた口調を崩さずに語った。それに安堵を覚えたのだろうか、今度こそアルナは力なく座り込んでしまう。

彼女の懇願を受け入れて、そして何かに気づいて左腕を見る。そして彼は、何か納得したような表情になった。

一度アルナと再び視線を合わせると、彼は足元に光る物体を見つける。それに少しの間魅入っていると、それを左手に握り、眼を瞑って呟いた。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
winners just the same（もしか
あなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないとし

たら。」

石が鈴のような響きを上げ、砕ける。そこから立ち上った光が彼を包み——その光が収まった後、先ほどの困惑した様子は無くなった。落ち着いた、力強い何かを感じられる。

「墮嚙の討伐……了解した、マスター。」

目を再び開いた彼の、その空のような瞳の色に、彼女は見入ってしまった。

「あれが魔石か……綺麗だったな。俺が思い描いた通りだ」

主となった少女を背に、彼女に聞こえないように呟く。その落ち着いた表情は、生死を賭けた戦いの場に赴く若い人間のものではない。

「あの光も、砕ける音も、感覚も……みんな、みんな思った通りだ」

突然現れた正体不明の男に、傷を負った騎士たちは疑念の視線を向ける。それにも構うことなく、白髪黒衣の彼は、視線を墮嚙に向けるばかりであった。

「凄いいんだな。あんなに怖くて仕方なかったのに、魔術一つでこうも心が落ちつく」

その呟きの意味を、周囲は知ることが出来ない。彼がどうしてアシュを前にして落ち着いていれるのか分からない。彼がどうして感慨

深い表情をしているのか分からない。

そして、なぜ彼が一人で墮嚙に挑もうとしているのか分からない。墮嚙が食事をしている前で、彼は足元に散らばっていた魔石をいくつか拾い、奴を見据えて言った。

「少しゆっくり食っててくれよ？ 何せ初めてだから時間がかかりそうなんだ」

「Arfe arfe infertia（強く強く、お願い）」
「Tufetufethowviel tioliariolem-issa（遠く遠く、ただ雲居を追いかける）」

その歌うような詠唱の直後、彼の周囲の空間が歪む。その歪みは一瞬で、だがそれが消えた後、彼の表情は苦痛に歪む。

「ぐー！！……はは、慣れないと……キツイな……幻想しろよ俺……」

魔術、それは実現された夢幻——その技法には、自らに幻想を重ねる‘戦歌’^{いくつうた}と呼ばれる技法がある。

体内を巡る血中に溶け込む幻子（魔力）に働きかけ組織の結合を強める強化の手法ではなく、‘より力の強い自分’、‘より足の速い自分’を直接重ねる技法。

現実とのすれ違いがそのまま存在自体に負荷となつて訪れ、自身の存在強度を超える幻想を重ねてしまった時、その存在は崩壊し消えてしまう——今彼が行っていることは、そんな発動自体が死と

隣接している技法だった。

「馬鹿な…周囲の空間が歪むほどの戦歌を歌って存在崩壊を起こさないなんて…」

自らの幻想と現実が、空間を歪めてしまうほどのすれ違いなど、もしステイリア自身であれば一秒と体が持たないだろう。だがそれを、目の前の青年は苦痛を感じるだけで成し遂げてしまっている。

「V e n o u m a r m a t u m X e e s e（私を覆う硝子の空に）Z i o e i o e o l j e l n i k w e i n（この爪が突き立てられるでしょう）」

左手を、何かを掴むように突き出す。その手を握ると、何か透明なものが、徐々に姿を現し始めた。

「おい…少しだけ借りるぜ…悪く…思っ…な…よ！」

左腕が、空間を剥ぎ取った。

それと同時に、オチガミ墮嚙の食事も終了する。
双方が、対峙した。

第五小節「恐れを終着」

「O a i r e f e e n e X e e n?（世界を感じているか？）

」

そうつぶやいた男の左手には、陽炎を纏う剣が握られている。その鍰は楕円状で、やや長めの刀身は細く、そしてやや歪曲している。この大陸では全く見られない意匠だ。

だが同時に、どこかで一度は見たことがあるような、そんな意匠でもあった。

男が駆ける。踏み切られた地面は深く抉れ、その踏み込みの強さをつかがわせる。その加速度は人が可能なそれを凌駕している。それに呼応するように、ヒトガタに握られた巨大な得物が男を迎撃に奔る。

「甘いんだよな、これが」

頭上から重力加速を伴って振るわれるそれは、人が受けようものなら一撃で骨身を粉碎するであろう。だが、男はその軌道の真横に進路を取ること容易くかわしてしまふ。ただ無駄に地面に全運動エネルギーを注ぎ込んだだけのそれは、余りに致命的な隙になっていた。

男とヒトガタの影が交差し、ヒトガタの左腕が肩との結合を失い、地に落ちる。男は反撃を警戒してすぐさま横に跳ねた。それが正しいものであるというように、その空間を横なぎに暴力が通過する。

距離を開けての着地。地面を削るように停止した彼は、その口元に笑みを浮かべて告げた。

「アルゴリズムの単純なお前なんか、負けるわけなんざ無いだろ

うが！」

低い姿勢。剣を片手に彼は、堕嚙のその圧倒的な暴力に恐れることなく突撃する。

「■■■■！！」

片腕を切り落とされた堕嚙は、かつて腕があった部分からおびただしい量の体液を流していた。黒ずんだ血液のような体液を垂れ流し、それでも尚堕嚙は攻撃を続ける。

横なぎに振り払い、切り上げ、振り落とし、殴りつける。それら一つ一つが必殺の威力を誇り、地面を、障害物を破碎していく。

「すれすれでだつてなあ！！」

だがそれも、掠ることはあれども当たるとは無かった。その体軀から考えられるものとは程遠いほどの身体能力を発揮し、堕嚙の周囲を縦横無尽と言っているほどに跳び回っていた。彼が動くその軌跡には、かすかに陽炎が残っている。

「あれが……人の動きなの？」

疲労を知らぬと言われたその間をおかぬ連続攻撃。その全てを回避しきり、その上で堕嚙の肉体に一つまた一つと傷をつける。

傷が付けられていくペースよりは遅いものの、負わされた損傷は目に見える速さで修復されていた。左腕の切り口も、徐々に小さくなっていく様子が見て取れる。

だがそれでも、男は攻撃の手を緩めることはなかった。

「■■■■！！」

自分にまわりつくかのように動き回り体を切りつけてくるその男に、墮嚙は一撃でも加えんとひたすらに鉄塊を振るい続ける。その力の暴風域は、ふつうの人間であれば数秒と持たずに粉微塵に吹き飛ばされるであろう領域。

だがその中で、その男は確かに存在していた。それはその場に居たどの人間にとっても衝撃的なことで、ただその光景に見とれているしかなかった。

そして、墮嚙の動きにも変化が訪れる。

「あの墮嚙が後退してる……」

一步、また一步と、その人間魔獣は後退を強いられた始めたのだ。ただただ暴力を振りかざし前進するのみと言われたその墮嚙が、たった一人の人間の手で後退させられていくその事実、その場の一同の驚きはさらに深まる。

そして、墮嚙はさらなる行動を見せた。

「つち、逃げるつもりか!？」

墮嚙がその体を翻し、逃走の構えを見せる。その動きに合わせるように、己憂部「ウベ」も同様の動きを始めた。

そして逃走の隙を確保するために今までより大きく鉄塊を振り回し、僅かにその男に隙を作ると逃走を始めた。

墮嚙を追う男。そしてそれを見て、ステイリアは彼の背中に向かって叫んだ。

「奴の進路の左前方に崖がある！　そこに追い込むんだ!!」

「——っ」

彼女の言葉が耳に届いたのか、男は堕嚙をその方向に誘導するように行動を始める。そして敵は、それに誘導されるように進路をずらしていった。

遺跡から外れ、足場の悪い山岳地帯に突入する。道の邪魔になる岩や時折生えている植物を叩き割り破界しながら、堕嚙は直進を続けていた。

「……見えた、あれが崖か」

落嚙と共に群れて移動する己憂部の、その向こうに崖が見え始めた。それと同時に、男は急接近を仕掛ける。

「
■ ！！」

「流石にお前と体力勝負なんてしたくは無いんでな、落とさせてもらっぜ！！」

近づくその男を振り払うかのように、落嚙は腕を振るうが、機敏な動きの男を捉えることはできない。攻撃をその身に受けつつ、次第に崖へと誘導されていった。その後ろでは己憂部が一体また一体と崖から落下していく。まるで自分から落ちて行っているかのようにだった。

そしてついに、落嚙は崖に追い詰められる。覚悟を決めたというところなのだろうか。堕嚙は立ち止まり、男に相対してその腕を振り上げた。

「止めえ！！」

大きく大剣を振り落とす落嚙。その大振りな一撃に隙を見出した

男は、その落嚙の懷に向かつて飛び込んでいった。振り下ろされる大剣。一歩間違えば即死のそんな行為を、男は平然とやってのける。そして彼は、落嚙の股下から背後に回り込んだ。立ち上がり、一閃。そして離脱。

「■■■!?!?!?!」

足首、その腱から体液を噴出させながら、落嚙は後方——崖の方へと倒れ込んでいく。巨体が倒れ、衝撃に土と砂利がわずかに舞う。そしてその上半身は、崖に飲み込まれるようにゆっくりと落ちていった。

その光景を、男は岩に背を任せるようにして眺めていた。

「……………」

落嚙のが落ちていき、勝敗は決する。それと同時に、あれほど湧くように居た己憂部たちも忽然とその姿を消していた。落嚙の驚異は、退けられたのだ。

「勝った……のか?」

男は岩に背をあずける体制のまま、ゆっくりと座り込んだ。

そしてその座り込んだ姿勢のまま、恐る恐るという風に左手を上げる。先ほどまで剣が握られていたその手には、今は何も握られておらず、ただ「震える」掌が存在するだけだった。

そんな自分の体を自覚して、納得のいったように、そして少し自嘲気味に呟く。

「き、気が抜けて解いちまったか……はは、さ流石に怖いなあおい……………」

先ほどの様子とは打って変わって震え、呂律が回っていない彼。そんな震える四肢を抑えようとしながら、彼は空を仰いだ。雨が止んだばかりのその空は、曇天ながらも次第にその雲の厚さを薄れさせていつていた。

遠くの方に、天使の梯子が見えている。

「……使い魔……かぁ」

そつと、震える唇を動かして彼は言葉を漏らした。

風が吹き、山の上にあたるからか雲の流れが速く感じられる。恐怖する感情を忘れようとするかのように、彼はずっと空を見上げて雲の流れを目で追っていた。

だがそんな時間も、そうそう長くは続かなかった。

「……誰か、来たのか」

耳に入る人の足音。その方向に首を向けると、そこには先ほど懇願してきた金髪に真つ白いローブを身にまとった少女と、似た髪色と顔つきで軽鎧を身にまとう女性が、歩いてきているようだった。その姿を認めると、男は大きいため息をつく。

「はぁ……あと少しぐらいは、見栄でも張らせてもらおうかな」

そうしてゆつくりと、大きく息を吸い瞳を閉じると、一番最初に呟いていた呪文を、再び彼は唱えた。

If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impostors just the same（もしあ

あなたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないとしたら。」

そして目を開くと、彼は元氣よく勢いをつけて立ち上がる。
そこには、震えなど微塵も残ってはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404y/>

いつかどこかの俺の世界【影】

2011年12月16日20時47分発行